

校長室の窓から

思い出の先生③ ～ T先生～



12月号でO博士のことを書きました。そうしたら、ちょうど発行日ごろに当のO博士からお電話が。このタイミングのよさにびっくり。さらに、電話嫌いのO博士が自分から電話をかけられたことに二度びっくり。

「ちょっと声が聞きたくなくて。」とかおっしゃるから、縁起でもないことを想像してしまい、急に心配になりました。心配でしようがないから、大阪に住む友人に様子を見に行ってもらったら「元気そのもの。」とのこと。

もう、ほんとに、人騒がせだから電話とかやめてくださいO先生。

さて思い出の先生(その3)は、大学院の師、T先生。

大学院の入試では、英和辞書を忘れたこと以外にも「小さな事件」がありました。当時はパソコンが流通し始めたころ。もともと機械が好きだった私は、授業にパソコンを使ったら面白いかもしれないと考えていました。ですから大学院での研究テーマは「パソコンを使った国語教育」としていました。しかし、県教委の指導によって「論理的思考を養う国語教育の在り方」に変更して本試験へ。

そして試験当日、筆記試験の後の口頭試問。

「久村さんはパソコンができるのに、どうして『論理的思考』を研究するのですか？それはほかの人でもできます。でも、パソコンを用いた国語科教育は、あなたしかできないじゃないですか。」

そう、発言されたのは民話のご専門のT先生。T先生のこの発言から、私の研究テーマは、なんと、まだ合格もしていないのに、その場で元に戻されることになりました。そして、

「パソコンは全くわかりませんが、私が久村さんを担当しましょう。」とT先生が私の指導教官に。

物腰柔らかなT先生のご指導は、その物腰に反して、たいへん厳しいものでした。例えば、
「先行研究にはすべて目を通しなさい。」

——（うそ～。そんなもん、きりがなくてしょ～。）

私は不満たらたらで全国の図書館から百本を超える論文を取り寄せること数回。

また、原稿用紙20枚の論文を50回、60回と書き直し。

——もう、国語教師としての私のプライドはズタズタ。

そんな私の不平・不満・自信喪失を見透かすようにT先生は、

「この研究は久村さんにしかできない。」とか

「久村さんは、IT関連の書物を日本で一番読んだ国語研究者です。」とか

「久村さんはもうプロの研究者です。」などなど、本当に

タイミングよく「よいしょ!」していただきました。

ちなみに、以前話題にした「教え子で同級生」のSさんに、「T先生は『よいしょ』がうまいよね。」と言うと、「私は一度も『よいしょ』されたことがない。」と不満顔。

「駄馬は餌を見せないと走らない。名馬は自ら走る。」なんて格好つけて言ってみたのですが、Sさんは、「私は駄馬だから『よいしょ』してほしい!」と譲らない。

…Sさんの中学生時代。彼女にとって「先生」だった私は、Sさんをちゃんと褒めたことがあったらどうか…。

少し駄々をこねたようなSさんの姿を見て、切なさとも申し訳なさともつかない気持ちになりました。そんな気持ちを振り払いたくて私は、

「いやあ、Sさんは優秀だよ。」

「どこがですか？」

（おっ、試す気だな。受けて立とうじゃないの。）

「字がうまいし。」（実際、師範級です。）

「それから？」

（失敗!「字がうまい」は最初に言うことじゃなかった。）

「計画性があるって…勤勉で…根性があるって…」

「思いやりがあるって…」

「ほう。」

「…美人だし。」

「先生。『オチ』はいりません。」

そんな二人の会話を、当のT先生にお話してみると、「二人でそんなこと話してるんですか。怖いすねえ。」

「どちらも名馬ですよ。わっはっは。」で終わり。何とか私の失敗をフォローしてもらいたかったのですが…

T先生のご指導の意図は、まったく知る由もありません。しかし、私にとってT先生のタイミングがいい『よいしょ!』は、苦しい研究生生活を乗り越えるのに必要なエネルギーの、主要成分でした。